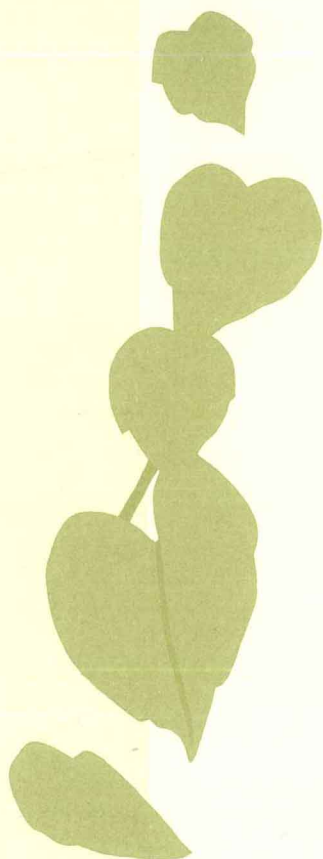




髪

瀬戸内寂聴

新潮社

髪^{かみ}

二〇〇〇年 一月三〇日 発行

著 者

瀬戸内寂聴^{せとうちやくちよう}



発行者

佐藤隆信

発行所

株式会社新潮社 東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二一八七一 振替 〇〇一四〇一五一一八〇八

編集部 〇三(三三六六五四)一・読者係 〇三(三三六六五一一)

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さす。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-311215-8 C0093

¥1600

© Jakucho Setouchi 2000, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

髮○目次

露	灰	幻	紙	海	花
127	103	79	59	37	7

髮 風 声 枕 鱗

231 215 191 177 153

装画 久村 香織

装幀 新潮社装幀室

髮

花

荷物は、土曜日の夕方届いた。

一月の終りの晴れた日のことだ。

宅急便を受け取ったのは、家の前の辻公園で、キャッチボールをしていた小学一年の純一だった。

「パパは？ いなかったの」

玄関で通せんぼしているように、でんとのさばっているダンボールのかさ高な箱を見下し、帰宅したばかりの弓子は、純一にまず訊いた。

土曜日の午後は、純一より三つ上の洋子のヴァイオリンのレッスン日だった。弓子は車で一時間半もかかる都心の師匠の家まで娘を送り、レッスンの間、稽古場で待ち、一緒に帰る。週休二日の一日めは、家族と口もききたくない様子で、自分の部屋に籠りつきりにせよ、夫の卓也が在宅するので、弓子は一応安心して純一を残し、家をあけられるのだった。

「パパ、寝てたんじゃないの、宅急便のお兄ちゃんが、野見山さあん、野見山さあんて、何

度も呼んでたの、それで純ちゃんちだよって、みんなが教えてくれたでしょ。だから、ぼくのハンコだして押して、ぼくが荷物もらったんだい。ぼくのハンコだよ」

得意でたまらないように、はしゃいだ純一は、ダンボールの上に飛び乗り、テレビの真似をして、タップを踏んで見せる。

年賀状の芋版を彫って以来、「じゅんいち」と彫った芋のハンコを何にでもべたべた押しただがるのだ。

「うっそう、芋のハンコなんかで、荷物くれっこないわよ」

弓子といっしょに帰ってきた洋子が、馬鹿にしきった口調でいう。

ダンボールの上から洋子に飛びかかると、純一は半泣きになって、全身で洋子に打ちかかっていく。

「くれたんだ、くれたからあるんだ」

「そうよ、そうよ。今のはお姉ちゃんが悪いのよ」

弓子は軀でふたりを引き分けながら、洋子に、

「パパに来てもらって。荷物を中に入れて下さいって」

といいつけ、二階へ追いやった。

「運送やさん、びっくりした？ 純ちゃんのハンコ」

「うん、クリーニングやのお兄ちゃんによく似たのっぽのお兄ちゃんなの、うまいねえ、き

み、ホンシヨクだねっていったよ、ね、ホンシヨクってなあに」

「ほんとのハンコやさんみたいということ」

その時、弓子をはじめて荷物を見直した。純一がおばあちゃまのりんごが来たといったのを鵜呑みにして疑わなかったが、この荷物には姑のもと子のいつもの達筆がない。卓也の好物だといので、こまめに信州からりんごを送ってくる度、習字が得意のもと子は、宅急便の宛名にも毛筆をふるった。弓子が卓也宛だと、決して自分で開けないのを知っていて、宛名はいつも弓子の名を書いてくる。

運送会社の配達カードがその上にべたっと貼られるとわかってからも、自分で、宛名を書きこむことは止めなかった。

今日の荷物は、配達カードだけがすっきりと貼りつけてある。宛名は「野見山卓也様」の下に「奥様」と並べて横書きになっていた。封書ならともかく、小包にこんな宛名も珍しいと思ひ、差出人を見ると、聞いたことのない園芸種苗店の名が書きこまれていた。店の場所は東京の下町になっている。そこもまた、何の思い当る記憶もない。

「どれだ」

卓也の不機嫌な声に、しゃがみこんで荷物を調べていた弓子がびくつと飛び上った。

「ああ、びっくりした」

「呼びによこしたんだろう」

寝ぶくれたようなはれぼったい卓也のこめかみが、瘤性らしく青筋を立てぴくぴく動いている。

「何だか変な荷物がきちゃったの」

「りんごじゃないのか」

「それがちがうらしいのよ、チューリップの球根って書いてあるの」

「チューリップ？」

「ええ、聞いたことない苗木やから発送してるのよ、ミヤキ種苗店ですって」

「誰から」

「それがさっぱりわからないの」

卓也が化粧タイル敷のたたきに降りてきて、弓子といっしょにダンボールの横にかがみこんだ。風呂に入ったのか、まだ濡れている頭髮が弓子の頬に触れ、ほのかに石鹼の匂いがした。

卓也が両腕で荷物をかかえあげた。

「何だ、見かけ倒しだな、大して重くないよ」

頑丈な卓也にかかえられると、たしかに荷物が急に小さく見えた。卓也はダイニングルームを横切って、ベランダへそれを運びだした。

玄関を掃いてから弓子がいくと、ベランダではもう箱が開けられ、子供たちと卓也が、そ

の上に頭を寄せて覗きこんでいた。

「何だ、これ」

卓也が目の中に笑いをためた久々の表情で、弓子を見かえった。子供たちは興奮して庭に飛びだし、小犬のようにじゃれあいながら走りはじめる。

箱の中にはびっしり球根がつまっていた。青い網袋と赤い網袋にわけて包まれている。青と赤の袋はそれぞれ二つずつ入っていた。ひとつの網袋の中の球根は、ざっと目算しても五十箇はあるだろう。

「どうすればいいの、こんなにたくさん」

「爆弾でも仕込んであるのかな」

「いやあね」

弓子は呆れて、しばらく覗きこんでいたが、生きた動物でも引きだすように、網袋のひとつを、両掌でそっと気味悪そうに持ちあげた。途方に暮れた顔で卓也を見上げる。

翌日も冬空が鳴りひびきそうに晴れていた。

弓子は日曜日だというのに朝の七時から庭に降りて、ひとりチューリップの球根を埋めていた。

昨夜食事中も、卓也と送り主の詮議を試みたが、雲を掴むようで何の手がかりもなかった。

た。卓也にいわれて、下町の種苗店に電話したら、たしかに送ったのは当方だという。

「お買上げ下さいました方は、私共でもわかりませんので……御代金をすでに頂戴いたしておりますので、こちらとしましては、それ以上は……」

という。時々、送り主が受取人と同一人のこともあるので、別に氣にとめなかったというのだった。想像していたより大仕掛けに、全国的に販売網を持っている店らしかった。

「只今お植えになりますと、早くて三月末から四月にかけて、もうぼつぼつ花が咲きはじめます」

ときばきした応対の男が、励ますようにそういったといい、弓子は受話器を置くなり笑いだした。

「三百くらい入ってるそうよ」

「ええっ、三百」

洋子が頓狂な声をあげ、箸を持ったままの手で万歳をした。三十くらい学校に持っていて植えていいかという。

「どうぞ、どうぞ、百でもいいわよ」

「そんなに花壇ないもの」

「ぼく、わかったよ」

それまで遊び疲れて、眠そうな眼をして今にも椅子からずり落ちそうだった純一が、突然